

あらた
ひらかわ
新 平川

宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長

未来への航路

豪華な衣装を 着た支倉常長

伊達政宗が造った遣欧使節船復元の手がかりは、支倉常長がローマ滞在中に地元の画家アルキータ・リッチが描いた「支倉常長像」(図1)にありました。この肖像画は、常長が拝謁したローマ教皇ハウロ5世の実家であるボルゲーゼ宮に今も展示されています。

縦196センチ、横146センチもある大きな油彩画です。2014年に上野の東京国立博物館で開催された「支倉常長像と南蛮美術―展」で、この肖像画が特別公開されたときに私も見に行きました。それまで図録でしか見ていなかった肖像画の実物はかなり大きく、見上げるように展示されていました。肖像画の前に立って20分ほどじっくりと眺め続けていましたが、この絵の中に支倉が乗った洋式帆船が描かれているのです。それを紹介

する前に、この肖像画の特徴をいくつか述べさせていただきます。

肖像画では支倉の全身を描いていますが、身につけた羽織・袴・着物(長着)は光沢のある、いかにも高級な絹のように見えます。ヨーロッパでの支倉の動向を記したイタリヤの歴史家シピオーネ・アマティーの「伊達政宗遣欧使節記」(仙台市史『慶長遣欧使節』編)によると、「大使

殿はインド製の豪華極まりない衣服を身につけていた」とあり、この肖像画では支倉の全身を描いていますが、身につけた羽織・袴・着物の多くは中国から輸入していました。しかしこの時期には京都の西陣でも、輸入した生糸を加工して絹をつくり、高級絹織物を生産する技術が進展していましたので、和風のデザインをほどこした支倉の衣裳は西陣でつくられた可能性が



図2. 罽に彫られた九曜紋

色の装飾までほどこされていた。薄は政宗の代から伊達の家紋に使われるようになったと伝えられ、魔除けや子孫繁栄などの意味がこめられているそうです。孔雀にも吉祥と魔除けの意味があります。松島瑞巖寺には孔雀のふすま絵があります(重要文化財「松孔雀図」)。政宗が再建した瑞巖寺に孔雀の絵を飾ったのも、そうした思いが込められていたのには驚かされません。

一方、鹿は神鹿ともいわれ、東北では五穀豊穡や悪霊退散の意味をこめた鹿(しし)踊りや鹿踊り(しし)を思いつかれます。鹿踊りには神仏の化身である鹿への尊崇と、捕獲し食用にした鹿の供養の意味があったとされています。政宗も鹿狩りを好んでいましたので、供養・感謝と尊崇の意味を込めていたのかもかもしれません。支倉の衣裳にあえて鹿を描かせた意味を考えてみるのもおもしろいでしょう。

てさせたものであったことは明白です。この衣裳をまとった支倉常長は伊達家を代表した使者である、政宗が保証するかのような紋様でした。料を尽くした最高級のいでたちは、民族衣装である和服と日本の装飾美をヨーロッパに伝えようとする政宗の思いが込められているようです。

このあでやかな衣裳はローマの入市式パレードで披露されました。ローマの貴人や騎馬隊に先導された支倉は白馬にまたがって、ローマ風の帽子(肖像画の左の机に置かれた帽子)を振りながら、こやかに群衆の歓声に応えたと記されています。道路に面した建物のバルコニーには絢爛(けんらん)豪華なタペストリーが飾られ、着飾った貴婦人たちが窓辺から手を振って歓迎しました。アマティーは「まるで凱旋將軍のようだった」と記しています。1615年10月29日のことでした。支倉が月浦を出帆してから、ちょうど2年後

34 支倉常長の肖像画

衣装の文様は 政宗ゆかり

殿はインド製の豪華極まりない衣服を身につけていた」とあり、この肖像画では、顔高いと思います。この肖像画では、顔の表情や衣装、刀などの装身具が精密に描かれています。着物と袴には白の絹地に薄(すすき)、羽織には孔雀(くじやく)と鹿があらわれ、足袋には金

愛用した南蛮風陣羽織とよく似ています(図3)。支倉の衣裳にまわれるのは各国の国王や大使級の人たちですから、伊達政宗の使者支倉常長もローマ教皇庁から賓客として迎えられたといえます。

こうしてみると、衣装も刀も支倉の正装として政宗が特別に仕立



図3. 政宗の南蛮風陣羽織



図1. 支倉常長肖像画



ひらかわ・あらた
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。館館長に就任した。

東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26―31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。

支倉が腰に差した刀も、ただの刀ではありませんでした。黄金の罽(つば)には伊達家の九曜紋が透かし彫りされ(図2)、鞘(さや)は黒く漆が塗られ